155
666

確實保證

耳病即治新法書

發兌 大學院書房

耳病即治新法書

●本書の心魂

此病を憂ふる人決して尠なしとせず、然れとも此病は他の疾患に比して苦感稍冷かおるものおるより、往々其治療の時期を過つて、其輕易なる者もあたら重症の域に進め、而して其大事に立至りたるに當つて、周章狼狽其治療に奔走するも既に其病位を高めたるを以て、治効決して速かならず、此時ふ當つて始めて其輕かりき當時を羨りたるを憾むも最早詮方あらをして、或い終身不具の人とおり、或い平素多病の人とおるは浩嘆ふ堪へざる處おり、總べて疾病は花の開くが如く、雪の積るが如く、少しく其治療の時を遲るゝあらば、忽ちにして疾病の華は爛熳として開き、患苦の雪は疊々として積ね、容易に之

東京都立中央図書館 TOKIO METROPOLITAN LIBRARY

れを解く能はざるに至る、去れば輕症の病は重難の患苦を生むの母なりと知り、早く之れが驅除の法を講ぜべきあり、然れども或は山村隙里に僑居して醫家を訪ふに不便あるの人、或は財政の妨ぐる處ありて醫藥を充分に得易からざる人に在ては、好し急治の必要を知るも、荏苒其時期を輕過して、知らず〳〵大患に陷るもの又以て少しとせば、殊更急治の覺悟を要もべきあり、然れども事情之れを妨くるの止を得ざるより、往々此禍害に逢遇する人少しとせず、余永く之を憂ひ茲に簡易なる其治療法を蒐めて本書を編す、去れば記せる處の藥劑は悉く藥舗に鬻きつゝある處の低廉にして安然なるものゝみ、仕方は悉く素人の實行し得べき輕易にして至便なるものあり、而して此法は皆永く實驗して其確効を知るものと、古卷に明言せる珍法を併

載し、加ふるに千草園發兒の實用奇術新報上に赫々として隱れなき聾耳を治愈して、厚禮と證明とを得たる確實なる呪法とを以て遂に此一編をなせり、讀者乞ふ宜敷此意を諒せられ、廣く其實用に供せらるゝあらば著者の榮之れに如くものあらず、而して本書は他の玩弄僞書と異り、永く實驗を經たる真誠なる新法書なるを以て、無限の配冊は少しく其價値を墜すの嫌なき能はざるを以て、茲に初版三百卷を刻するに停むれば、其價從つて低廉ならざるも、乞ふ本書の働を愛して書櫃に藏を給ふあらは幸甚、

明治廿四年中元の日

編者識

●聾全治の御禮

（實用奇術新報社の許可を得て本書に掲く）

冠省陳者私事無て貴社御發兌の實用奇術新報を愛讀致居候處本報第四號中田澤日本居士の筆に係る聾を聞ゑさせる法を拜見致其御法通り試行致候處實ゝ御次言之通り好結果を得難有候是れ單に貴社に如此良書有之候所以と誠に感銘奉萬謝候偖又貴社々員田澤日本居士と申さるゝ何所の御住所にて實名い何と申さるゝか詳知致度何卒御教示被下度又近刊の新報上へ此書面御掲出相成聊か貴社社名聲を測り貴社の御厚志の萬分を謝し度依て右申入候早々頓首

明治廿四年六月九日　　加賀國石川郡字室村　安永庄次

千草園雜誌社　御中

書中法目

●耳だれ即治法
●耳の霜燒を治す法
●耳の鳴るを止める法
●耳の中へ物入たるを治する法
●耳より膿出るを治する法
●聾を直す奇法

●耳だれ即治法

（第一法）

耳たれには鰯の頭を黒焼にして飯粒に交せ合せ其耳たれの出る耳の付根へ外より貼り置くへし直る事實に奇妙〳〵

（第二法）

雨のかゝらぬ所に生へたる麥を取り能くもみ其液を三滴位つゝ晝夜三回注入をべし四五日間にして必ず全愈をる一大奇法おり

（第三法）

耳たれを直ちに最も簡易おる法い生大根の搗汁を紙の小縷に付けて耳にさをへし必ち奇効あり

（第四法）

耳たれを簡易ゐ治愈せんと思はゞ蟬の脱殼を細粉をおし胡麻の油ゐ

て適宜ゐ解かし耳たれの出る處へ一晝夜二三回二三滴宛注入する時は早くは二三日遅くも五六日の内ゐは必らず全治する事奇妙と云ふべし

●耳の霜けやを治す法

生姜を摺り卸し其汁を搾りて少し温を毎日二三回宛塗抹をへし二週間の後ゐい全治をべし

●耳の鳴を止める法

食塩を温を白木綿類にて製したる枕の中に入て卧べし苦し冷たれば又温めて用ゆるか或い取り代へて用ゆべし

●耳の中へ物入たるを治する法

耳の中へ物の入たる時い唐弓の弦を切小口へ膠を付て差入れて出をべし若し弓弦おき時い觀世ゟりの先へ膠をつけて出をおり又竹の管

にて強く吹てもよし

●耳より膿の出するを治す法

（第一法）

一枯凡　一灸　一黄丹　五分

を細末にして耳の中へ吹入るべし又腫れ痛むにも効あり血の出るには竜骨を粉とおして吹入べし

（第二法）

倍子粉（ふしのこ）を耳の中へ吹入るゝか或は古綿を黒焼にして綿に包み て耳の中へ入て充分に膿を取りて後石炭酸か又は硝酸銀液の極く稀薄なる者にて洗ふべし

●聾を直を奇法

（第一法）

聾を直に奇法とは則ち附子（藥名）を酢ゑ浸し置削りては小指の如くおし耳へ入置時に必らず聞へる者ありと同患者に須らく御試用あるべし

（第二法）

男子おらば牝猿の頭を黒焼にして素湯ゑて呑女子おらば雄猿の頭の黒焼を呑むべし治る事妙あり

（第三法）

一　亂　隠　急　如　律　令

耳の聞へさる時右の呪符を縦二寸横五分の白紙に書き清水にて呑むべし

2 N-71

明治廿四年九月三日印刷
同　年同月四日出版

横濱初音町一丁目六番地
發兌元　大學院書房
仝所
發行兼編輯者　松尾源之助
東京京橋區木挽九丁目六番地
印刷人　青山藤四郎
横濱野毛町二丁目
賣捌　千草園書籍部

060155-000-7

特24-94

耳病即治新法書

大学院書房

M24

CBK-0034